

やうに見える。接觸面に對して柱狀節理の向きが型の通りであるから、實地に就て觀察する時は、層一層驚異の外は無い。この天然記念物は、國賀海岸を、此處まで延長して、或は單獨に保護したいは元よりのことながら、前記擴張部の南

端とも相當に距離があるのと、指定地の分布關係によつて、その實あるも公に指定の名を得られぬは、心なき岩脈に對して、同情の感なきを得ぬ。否學界の爲め遺憾に思ふの外は無い。(完)

(昭和一〇、七、一五稿)

江濃境上に於ける美濃の山村

—揖斐郡春日村字古屋に就いて—

秋 山 桓^{タケ} 士^オ

一、序

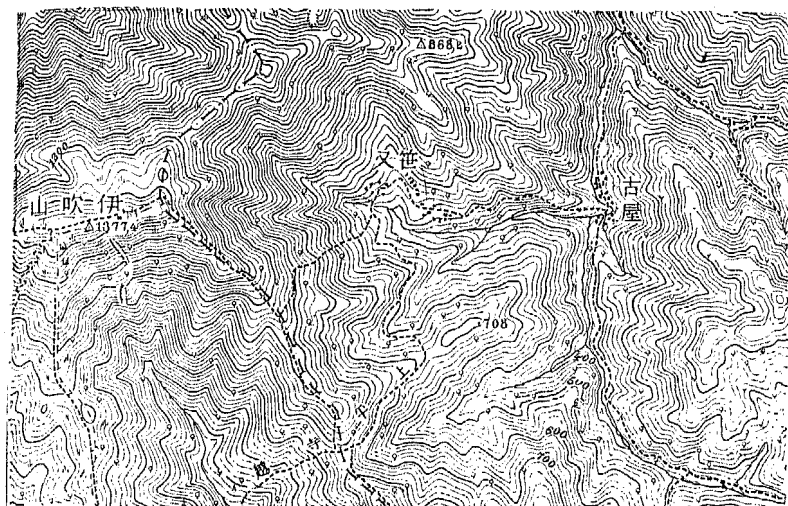
伊吹山に發源して本流揖斐川とオブセケントの流路を取りつゝ、粕川斷層線を北流する粕川は近江カルスト靈仙山近傍に發源して鈴鹿養老兩傾動地塊間の斷層角窪地をオブセケントに北流する揖斐川支流の牧田川とは相似形の姉妹溪谷

を爲して居る。

而して此の粕川の谿頭聚落が揖斐郡春日村字古屋であり、牧田川のそれが養老郡時村字時山である。此の姉妹谿谷に於ける二つの谿頭聚落は各々直線距離的には平野を距る事僅かに數料の地點ではあるが、重疊たる山岳に圍繞されて

形地と置位の屋古字村日春郡斐揖 圖一第

(一分萬五測陸)いなはで落村住定で落聚動移的節季は又笹の方西屋古



地
球

第二十四卷

第三號

二〇六

四六

居る爲に炭焼を本業とし製茶を副業とする水田皆無の模式的なる純山村生活を爲す點に於て、將亦江濃境にありて地理的にも歴史的にも近江との文化的交渉多く、言はば美濃文化の影響比較的稀薄なる孤島的文化景觀を呈する點に於て姉妹谿頭聚落としての地理學的興味がある。

本文はかゝる對比的なる研究意圖を持つて兩三度古屋を訪れたる折の見聞録であつて、本誌第二十四卷第一號に掲載されたる時山に關する拙稿の續編とも言ふべきものである。

二、交通路

古屋への主要交通路は、(一)粕川の谿口聚落市場から谷壁の山路を六合、川合、中山等の聚落を経て約十三杆溯上するか、(二)不破郡岩手村字谷より北西に約六杆海拔五百六十米の峠路を越えて入るか、(三)關ヶ原町字小關より北に約六杆海拔六百四十米の峠路を越えて行くか、(四)又は近江坂田郡春照村字上平寺より海拔八百八十米の上平寺越凡そ六杆の坂路を擇ぶかで

ある。

言ふ迄もなく是等の山道は自轉車すら通じない程の峻しい小徑で徒歩以外に手段はない。此の事が一に此の村をして純然たる文化的孤島聚

第 二 圖

不破郡岩手村谷から揖斐郡春日
（海抜五百六十米）に入る古屋



落たらしめて居るのである。遠く關ヶ原合戦當時、敗將宇喜多秀家は關ヶ原から此の谷に分け入り粕川を下流まで抜けて土豪に助けられ、

江濃境上に於ける美濃の山村

小西行長は此の谷の中央に隠れて遂に捕へられた。養老郡時山谷から近江に通ずる島津義弘の敗走路に比して登場人物の武將の生涯がハッピーエンドでなかつただけに哀愁身に泌みる山路である。

三、聚 落 形 態

聚落は長谷川（粕川の川合から上流を言ふ）右岸の谷壁又は狭い河成段丘面に密集して階段状を爲し、左岸には只一二軒筆者の一夜の宿となつた伊吹館其他が尾根の一端の懸崖上に、曲流する谷川を前にして例外的な位置を見せてゐるのみである。

家屋排列は全く平地の少い谷壁斜面の地形條件に制約されてまち／＼であり、随つて家の向きも日當りを考慮してあるとは思へるが必ずしも一致して居ない。家屋形態は入母屋萱葺平屋建の平入が普通で、瓦葺のものは僅かに小學校の分教場其他三四軒に過ぎない。他にトタン葺三四、杉皮葺も一二見受けられた。萱葺が大多

數を占めて居るのは萱の生産の多い山村の一般的特徴である。

第三圖

山村古屋を長谷川左岸
西方(よ)り望む



最も目を惹いたのは美濃の平坦部では見られない入母屋萱葺の異式の二階建と、入母屋妻入の萱葺との家屋構造である。是等は後に記述する如く近江との文化的交渉の結果ではないかと考へる。

第四圖

古民家の

正面は屋家の二階建につて居るが
樹木爲に明瞭に分らない



要するに廣い庭を持たない小面積の宅地、勾配の急なる屋根の形式、家屋相互の密集、家林なき裸村、それ等は山谷猶額大の地形と降雪量の多い伊吹山東麓の氣候の制約を受けた必然的現象であらうが、一方に於ては純山村生活の形

式が聚落をして斯くの如く非農耕的聚落形態にまで規定して行くのであらう。

四、人 口

聞く處に依れば、明治十八年に於ける古屋は戸數僅かに十七戸の小聚落に過ぎなかつたが、明治卅四年には廿二戸に増加し、昭和五年のセンサスには人口二百〇三人、昭和十年の現在では戸數三十五戸、人口二百三十八人に達して居る。他の多くの山村に於けるが如き人口漸減現象なきのみならず、最近五十年間に二十割の増加率をすら示して居る。大體春日村は本籍人口六、一四五人、現住人口四、二〇二人で離村者二千名に達し、粕川谷北部の美東は其傾向特に顯著である。然るに同系の谷でありながら古屋は其一戸當人口數六、八人にして古屋を含む春日村の平均五、一人に比して甚しく人口充實の姿を見せ、次男以下の子女の向都離村乃至は他農村への出稼現象僅少なる事を示して居る。此處にも谷源に位置する孤立聚落の一特異性が現はれて居る様に思ふ。

五、經 濟 生 活

江濃境上に於ける美濃の山村

古屋の經濟生活の基調を爲す地域は押又谷、尾又谷、笹又谷、栗尾谷、東笹又谷、戸谷、藤川谷、池谷の八谷である。栗尾谷には蕨萱が多く戸谷には山椒魚の棲息を見る外、池谷には石楠花の群落があるが、主要生活資源は以上の谷々の木材を原料として生産される古屋炭と稱する黒炭である。炭の原料になる木は樺、樫、モミデ、カタシデ、アカシデ、メヅラ等の二十年を経たもので、炭質も凡そ此の順序に従ふ。竈に入れて焼くに三日、冷やすに四日、製造日數は約一週間である。

出來高は一竈平均二百貫、地元で編んだ五貫の萱俵に詰めて四十俵、然し全生産工程を考慮に入れると一日平均二俵にしかならぬと言ふ。何處の山でも炭焼の平均生産力には大差がないらしい。本年は一俵の値段が凡そ七十五錢、原料代は木炭三俵につき一圓を要すると言ふから簡單なる原價計算をすれば原料代と手間代は半々である。然し古屋から岩手村まで運ぶとして

其運賃一俵に付き十三錢、外に俵代木炭検査料其他諸掛を控除しなければならぬから一日の平均收入は意外に少ないものであらう。炭焼は九月月上旬に始つて十一月下旬に終るから此の三ヶ月間に生ずる木炭の賣上高が一年間の主たる收入である。

木炭の運賃は古屋では定額ではなく其時の炭價に比例する、一般的に言へば人力に依る木炭の運賃は非常に高いので、それが製炭業の死命を制する事ともなり、運賃から見えた木炭の製造圏とか、炭價の騰落に依りて左右される製造中間圏が距離的に成立する。随つて僻遠山村の救済は製炭木材等の方面から論ずるならば、先づトラック道路の建設が急務であると考へられて居る。言はゞ木炭製造圏の擴大が山村振興の一助となると云ふ譯であらう。但し木炭其他の運搬を以て生業とする人達は、トラック道路の建設に依りて消費經濟の刺激を受けるのみならず、轉業と言ふ生活革命線上に置かれて文化の浸潤

と共に生活苦を恐れなければならないのは悲しむべき事實であらう。

却説、此の村の副業は何か。製茶である。もとく柏川谷は封建時代より西山茶と稱する茶所であつた。思ふに冬期間三尺乃至四尺の積雪量を示す溪間の四十五度以上の急傾斜面の谷壁が茶園となつて斯業の隆昌を見るに至つた裏面には、(一)谷間の急斜面は平面に較べて霜害が少ない(註、同じ斜面でも東向斜面は霜害多しと言ふ)、(二)南北走向の深い斷層侵蝕谷は北西の冬期の季節風の蔭で比較的暖かい等言ふ自然條件の外に、(三)此の谿頭聚落の純山村式生活様式が農村の生活様式に較べて、摘葉期の五月末から六月にかけて特に勞働力に餘剰を生ずる事、(四)製茶原料の木炭が豊富である事、(五)重い木炭を軽い茶に變へて運ぶ山地特有の交通地理的意義が含まれて居る事等の理由が伏在するであらう事は、養老郡の時山の場合と同一である。

山の人の茶揉の生産力是一日に約二貫目（生葉で約八貫、養老郡時山に於てもそうであつた）で、茶一貫目最高二圓五拾錢、最低一圓三十錢平均一圓八拾錢内外である。生葉の原料代約一割と稱せられるから山村には現金収入を齎す貴重な副業であらう。出荷圏は不破郡の關ヶ原垂井で一部が長濱へ移出される。長濱商人の取引はかなり歴史的なものである。

養蠶は夏子が主體である。本年は繭の値段が稍見直して居るので飼育の家を多く發見した。此の村の特産物としては蒟蒻玉に藥草がある。前者は栽培容易である爲に茶畑、桑畑等に混生せしめて、品質優良多産、垂井、府中、關ヶ原、大垣へかなり出荷される。藥草は伊吹當氣、千休、黃蓮、サイシン、房風等で野生と栽培の二種類がある。現在春日村には藥草組合が組織されて居るので其手を経て賣買されるが、昔はそのまゝ江州の上野に運び出されて有名なる伊吹藥草として賣出された。此の事は古屋が伊吹山

を中心とした近江の藥草栽培園内にある特異な現象で、古屋を訪れる外來者の多くが植物研究者である所以でもある。

六、勞 働

一年間に於ける勞働力利用の状態を見ると雪の消える春先には男は冬籠用其他自家用の薪を切り、女は谷壁の畑地で茶や桑の畑仕事にかゝる。巡檢途上に眺めた畑の耕作者は殆んど全部と言つて良い程女子であつた。思ふに山村古屋の急斜面（想像以上の急斜面でジツと立つて居るだけでも危険を感じる様な高い處が多い）の畑は甲斐々々しく「たつゝけ」を佩いた是等女性の殆んど獨占的職場であるらしい。

五月下旬頃から約二十日間は茶摘と茶揉が行はれる。所謂製茶時期である。摘葉後は施肥の仕事にかゝる。草を刈つて入れるのである。次は養蠶であるが、夏蠶は七月廿日頃上簇するので夏の終りにも桑畑の施肥が行はれる。空の晴れた九月初旬から十一月末までは山に出て本業

の炭を焼く。炭は製造人の技術次第で品質が決定されるから懸命の仕事であらう。出来上つた炭は岩手、關ヶ原へ背板で運ぶ。這ふ様な坂道である。土地ではこれを「炭をオヒネル」或は「炭をセドル」と言つて居る。五貫入三俵を岩手村まで運ぶと前記の様に三十九錢、歸路は多く食料の米をオヒネる。米一俵の運賃は六十錢也だが大抵二斗宛二回に運んで居る。

冬も一月を越す頃は三四尺の雪に埋れて、家では男は岩手村から買入れた藁で機械編の繩を造り女は炭俵を編む、炭俵も買へば一俵五錢につく。一日二十枚位は造ると言ふ。

正月は依然舊正月で、それが終つて雪が消えかゝると再び薪切りが始まる。かくて村人は言はゞ平和に山の暮しに満足して、或は無意識的に時には諦觀的に、祖先代々住み慣れた山の里で、此の村を離れ様ともせず、一切の近代的文化とは何の關りもなさかの如くに、此の生活様式を繰返して行くのである。村に一本のアンテ

ナをも見出す事が出来ないのは電氣の恩恵がないからで、夜は筆者には幼年時代を思ひ浮べる柔らかなランプの光が輝いて居るのを見た。

七、食 べ 物

古屋は現在全戸米食だとの事である。炭焼と製茶と養蠶と藥草の山村で雜穀の生産が皆無に近いからである。米は岩手村から買ふ。

藩政時代には米を供給して呉れる岩手村が竹中氏領で、春日の谷は大垣藩領であつた關係から、凶作の年には米の供給を絶たれる事が多かつた。大垣藩の百文につき三合八勺の米の配給も大垣藩領表佐村（不破郡表佐村は古屋を去る約十三軒の南方）で行はれた爲、峠を越えて行く山路に於て空腹の果斃死する者多く、木の芽草の芽を食用に供したとは、米食の今日を誡める古老の語り草である。

野菜は宅地附近の僅かな階段畑から馬鈴薯、サ、ゲ、里芋、北海道カボチャ、シヤクシナ、小豆、味噌豆、ゴボウ、ニンジン、筍、其他葛

の粉や甘茶に至る迄、凡そ自給自足の程度に栽培されて居る。北海道カボチャや馬鈴薯は腐る程度に積上げてある事がある。是等で出来るだけ米の消費を節約するのであらう。山の芋、山藨、蕨、ぜんまい、山葵、山椒の類や、アマゴ、ハエ等の川魚が主要な副食物の役割をする事は勿論である。四月末の巡檢の折には宿の食膳に蕨の煮付、山椒の實や葉の佃煮、山葵の葉のしなし、筍の煮付等々を見出して、山の味覺を満喫した事であつた。

晝間は山稼で留守になる事が多いのと冬の降雪の爲に養鶏等は全々行はれないので鶏肉や鶏卵の恩恵は薄く、村は一軒の旅館を除いて他には菓子屋も豆腐屋もないから、豆腐や油揚げは祭の日に自製するの外はない。農村に於てよく見受ける乾餾鈍類の食用も重量多くて運搬不便の爲に餘り用ひられない。

雪が多くて冬籠の生活が長いのと他に娛樂がない爲に飲酒を楽しむ風が強いが、それも運搬

と云ふ點から考へると一般山村以上に出るものではないと思へる。斯くの如く觀察し來れば僅かに高度五百六十米距離六軒の峠が如何に古屋の生活を山村らしく色彩り生活を規定するかを知り得て、轉た感慨に堪へないものがある。

八、民 俗

山には山らしい民俗がある。十一月三十日には「神迎ひ」が行はれ、舊正月の九日と舊二月九日には「山の講」が行はれる。餅と酒とのお祝である。御祝の餅米は極く最近まで山を越えた岩手村のある米屋で、村全體として半年一期の掛買をしたものだと言ふ。米屋から見れば各戸に三升五升と貸すよりは村全體に纏めて貰ひ度かつたのであらうし、借りる方でも村全體と言ふ團體的威力を利用したものであらう。米産のない山村の面目躍如たるものがある。

舊正月には藁で大蛇を造つたり、或は珍奇な造り物をして山の神を祭つて居る。山の神を女性と見ての造物なので、中には必ずしも善良な

る風俗とは言ひ得ない物もあるのであるが、之を止めると村に火事が多いと怖れて今尙行はれて居る。附近の村々にも類似の造物があるので古屋に限つた話ではないが、山村の人達の敬神生活と性生活のコンビネーションの一面を見る様な氣がする。

後に述べる處があるが、古屋は下流の小宮神、川合の娘村である。母村たるそれ等の村々では早婚と近親結婚の風があるが、古屋ではそれが一層強調されて行はれて居る。結婚は殆んど村中で行はれ、他村との通婚の事實は三四十年前に下流の小島村から嫁入つて來た者が一人あつたと言ふ位であるから、此の點では養老郡時山などの近江との通婚が見られる處とは全く趣を異にして居て、孤立的な純谿頭聚落と言つた色彩が極めて濃厚である。他村の人と言へば分教場の先生位のものである。凡そ同一の生活形態の中にある同系の谷の山村又は母村との間にも通婚の事實が見られない裏面には、色々の社

會的經濟的歴史的條件が働いて居るのであらうが、谿頭に隔絶されたる地理的位置が最も重きを爲すものであらう。

結婚は娘と男との合意を親が承認する形式であるとは他村の者の言葉で、一般に風儀がよくて堅實で普通と異なる所がないとは村の人の話である。蓋し山村に於ては農村以上に男女相親しむ機會が多い。古屋に於ても冬籠の退屈さから附近の親しき者達が何時とはなく一軒の家の爐邊に集り、四方山の話に夜を明かす事もあれば、夏の盃盃盆頃の幾夜を親しき間柄だけに誰憚らず男女入混つて踊り明かす事もある。そうした事が結婚の動機を作る事は言ふ迄もない。

古屋は暫く置き、其の母村たる川合、小宮神には今尙「草刈」の奇習がある。六月下旬（廿五、六、七日頃）養蠶と製茶が終末を告げると「茶休」^{チャヤスミ}をして祝ひ、翌日から所謂「草刈」の行事に移る。之は村の青年男女が一齊に村の立込場（區有地）に出て、桑や茶の樹の肥料ともする草を

刈取る事を云ふのであるが、其の日の村の娘は化粧して山稼には珍らしい衣服を着けて出る。豫定の刈取を終れば後には若者との楽しい語らひがあるので其の日の仕事は素晴らしいスピードを持つて行はれるとか言ふ。山村に適はしい「草刈唄」が其の時に聞かれる。又同系の粕川谷の一支谷たる美束には「秋あげ」と稱する秋祭が行はれる。十一月廿三日である。此の日一日は全くの開放日で或程度の道德的過失が默認されるとさへ言はれて居る。以上の如き如何にも山村らしき習俗が古屋に於ては明瞭には現はれて居ないし、結婚式の夜、村の青年が三十貫から五十貫の大石を擔ぎ込んで祝福の印とする美束附近の奇習をも、同系の谷ではあるが持つて居ない。それ等は恐らくは村としての歴史が比較的淺い事と小さい孤立聚落で而も近親結婚を行ふ處から、統制ある集團生活が行はれて、上述の如き奇習の發生乃至は模倣を妨げたのもあらうが主因は戸數の少ない關係から若者の數が少ない

事と、爲にその勢力が意外に小さい結果ではないかと思ふ。随つてそれが一の立派な行事乃至は慣習として成立はしなかつたにしても、凡そ同じ意味に於ける生活が、娯樂の少ないかゝる山村に絶無であるとは考へられない。他處者の一人も住んで居ない生え抜の人ばかりの村へ兩三度巡檢を行つただけでは容易に其の全貌を明かにし得ないが、村に意外に姉女房の多い事などを聞いて意味深い現象であると思つた。

九、文化系統（結び）

小川榮一氏の揖斐郡史に據れば「古屋は川合の出郷にして西南一里半の地點にあり」とある。今古屋で最も多い小寺姓や坂口姓の家は川合系統であり、藤原姓の家は小宮神系統であると村の人は言ふ。宗教關係を見るに古屋には寺院がなく（神社は海戸神社と稱する立派なものがある）川合系統と言はれる家は川合の淨土宗鎮西派光明寺、小宮神系統と言はれる家は小宮神の本願寺派光榮寺に屬して居る。

更に古屋の西方二軒弱の地點に笹又と稱する戸數十七戸ばかりの夏季出作の村即ち季節的移動聚落があるが其母村は川合と小宮神である。

(笹又の季節的移動聚落に就いては後日詳細なる報告をし度いと思ふ)それ等を綜合すると古屋の移住系統は川下の川合、小宮神である事は先づ間違はない。移住年代は不詳であるが、海戸神社が元龜年間竹中半兵衛夫人の祈願せし所であると言ふから、聚落は少なく共三百五十年以上の歴史を持つものと考へられる。

最後に古屋の文化系統を観るに當つて次の諸點は注目に價する事柄だと思ふ。

(一)永祿年間此の粕川谷一帯は近江の佐々木六角の支配地であつた。古屋の栗ヶ岳には今尙文祿年間に近江へ移轉したと傳へられる佐々木氏の觀音寺跡があると聞いた。又天正十九年頃は近江佐和山の石田三成の支配下でもあつた。

(二)粕川の谷を昔「濃州君ヶ畑」と言つたと村人は語つて居る。江州愛知郡の君ヶ畑、犬上郡

の大君ヶ畑^{オヅ}と關係あり氣な地名ではある。

近江から全國に分布した木地屋が美濃の揖斐谷や根尾谷に入つた事は小川氏の揖斐郡史にも記載されて居るが、粕川の一支谷たる谷山の小倉も亦木地屋であつたと言はれる。藩政時代の粕川谷は大垣藩の支配下にあつたが大垣藩御預りの「宮百姓」としての誇りを持ち、明治二十年頃までは女子の帶の兩端に菊花の模様を縫ひ込んであつたと言ふ。兎に角「濃州君ヶ畑」の地名は色濃い近江や上方との關係を聯想せしめずには置かないものである。

(三)古屋の入母屋萱葺の民家の半は其の屋根の形式に於て江州系である。棟飾の兩端が妻に當る三角形の煙出しの位置よりズツと長く延びて覆ひかぶさつて、家の正面から見ると一種の威嚴を示すのは江州に於て見られるもので、美濃系統の棟の兩端が垂直に切れて居るものとは違つて居る。又美濃平坦部に少ない入母屋妻入が此處では多く見られるのも江州の影響でなけ

ればならない。今日では大工も屋根葺の職人も美濃から多く入る様になつたが、封建以前には揖斐谷や遠く根尾谷まで江州の大工が入つて居た様に、神社建築は特に江州の棟梁に依つて爲された。此の村へも當然距離の關係から進出しに相違ない。

(四) 今日でも茶商其他の長濱商人の進出を見る程であるが昔はより強力な長濱商人の商圏内であつた事が古老に依つて語られる。

(五) 近江へ山稼に出る者の言に據れば、夏着と稱する麻の着物を用ひ、冬もこれを重着する事、或は背板の形から腰襖の當て方、さては手拭のかぶり方まで江州の愛知犬上郡邊と酷似すると云ふが、どの程度まで確實性があるかは筆者には即斷が出来ない。

併しながら、以上の諸點を考慮に入れる時に今日では行政區劃的にも、交通的にも、文化的にも美濃の古屋ではあるが、封建以前には必ずや近江の上方文化をより多く吸収して其の文化

圏内にあつた事であらうし、特に其の文化の影響を保守的な山村であつただけに長く今日まで傳承して來て居ると思はれるので、觀察すればする程美濃とは異なつた多くのものがあるのではないかと思はれる。そうした意味では江濃境上の山村時山も古屋も姉妹聚落としての類似性を發揮して居ると見る事が出来るが、時山が近江と血族的にも交渉があるのに對して、古屋の場合には單なる文化的交渉に止つて居るから、現状のまゝで進めば時間的には遙かに早く古屋は美濃文化の色彩で塗り潰されて行く事であらう。

主要參考文獻

一、小牧實繁助教授 近江カルストの村々 地球 第二十三

卷 第二號

二、佐々木彦一郎氏 山村の經濟地理

地理學評論 第十一卷 第六號 同第七號